巻頭特集

中京大学附属中京高等学校 硬式野球部

全国一の誇りを胸に

ここ八事山東海の
大都名古屋の東に
中京の名を負ひもちて
城と守る我が学び舎
凛乎とかざす真剣味
見よ躍進の先輩の業績

監督
高橋源一郎さん
「個々が明確な目標を持ち、それに向かって自ら考え行動することで叶える。そんな力を身に付けてほしい」

キャプテン
小林満平君（3年・内野手）
「高橋監督が就任して4年、自分たちの力で監督を甲子園に連れていきたい。今年は必ず行ける！」

マネージャーのみなさん
（左から）**宮澤菜々子**さん（1年）、**山田麗子**さん（1年）、**井坂美紀**さん（2年）、**三川萌子**さん（3年）、**林杏美**さん（3年）、**小橋千春**さん（2年）、**日野芙美子**さん（1年）

2009年夏、甲子園の空に中京大中京高校の校歌が響いた顔をぐちゃぐちゃにして泣きながら、最高に晴れやかな表情を見せた選手たち43年ぶり7度目の全国制覇から5年今年も球児の夏がやってくる

90人が一つの目標に向かいひたすら真剣に野球に打ち込む

相手は県勢初の決勝進出を果たした新潟・日本文理。1回裏、4番堂林翔太のバットから延びた本塁打。この先制2ランから点数を重ね、両校激しい攻防を見せ合う。6回、中京は驚異の6得点、7回に2点を追加するも、9回には2アウト走者なし6点リードから、1点差にまで詰め寄られる。手に汗握る最終回、最後はサードライナーで3アウト、中京大中京が2009年の夏を制した。試合が終わり、笑顔でお互いをたたえ合う抱擁は見る者に感動を与えた。

中京商業時代から数えて春夏甲子園通算131勝、春4回、夏7回の優勝回数は、すべて全国最多。近年は、他に愛知代表の座を譲っているが、前回の全国制覇から5年が過ぎ、いま中京の選手たちは91年の歴史で先輩が残した偉大な成績を塗り替えようと練習に打ち込んでいる。「今年はどうしても甲子園に行かなくてはならない」と高橋源一郎監督の言葉は重い。

1年生28人、2年生27人、3年生28人、そして7人のマネージャーがいる。野球部は90人の大所帯。16時に練習が始まり、選手たちが集まる。16時半を迎えるころには、グラウンド中に部員の大きく激しい声が飛び交う。

中京のグラウンドを訪ねたのは5月の中旬。春季大会の決勝を控えた時期だった。結果は愛知啓成に1点差で敗れたものの、5月末の東海地区大会へと進んだ。夏に向けての仕上げでもあった大会。ここでの経験をもとに、最終調整がぎりぎりまで行われる。

強さとさわやかさあるプレー伝統校らしく正々堂々と

練習をよく見ると、マネージャー以外にも次の練習の準備をスムーズに進める選手、土にまみれて走る選手からボールを受け取り監督に渡す人、1年生に指示を出してグラウンドを整備する人など、さまざまな役割がある。ベンチ入りが許されるのは甲子園では18人のみ。実際にプレーするのは、その中からさらに選ばれた9人だけだ。しかし、練習を支える力なくして強豪の名は語れない。

打たれるボールを取り送球する守備練習シートノックでは、1球1球の処理に監督から厳しい言葉がかけられる。「この1球だろう！前の試合で取れなかったのは！気迫だしてやれよ！」。主将として選抜出場、準優勝の結果を残した監督の言葉には、すべて意味と重みがある。選手は全身を集中させて、聞き入っていた。

「全体的に実力がある」と監督は今年のチームを評価する。昨秋からエース番号を背負う3年生の粕谷太基君、そして2年生で頭角を現し春の準決勝で東邦を完封した上野翔太郎君、二人が影響を与えながらお互い成長を続けている。

また、3年生山本源君にも注目したい。彼の打線が爆発すれば、流れができチームに勢いがつく。愛知制覇、そして深紅の大優勝旗獲得に向け、中京大中京野球部は、もてるすべてで戦う。

高校を運営する学校法人梅村学園。建学の精神には「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」とある。知・徳・体のバランスがとれた人格形成を目的の一つに、生徒たちは日々の学校生活を送る。部活動はその一部だ。

「『中京のプライド』をもって戦ってほしい。先輩が積み上げてきたものを、どう自分たちに生かすか。伝統があり注目もされる、勝つことだけが求められるなかで、自覚をもって高校生らしい野球をしていく。この夏は死にもの狂いで一丸となって甲子園に行く」と監督。

中京らしい、さわやかな活躍を期待する。

文／遠藤千明　写真／D-studio　デザイン／久富優佳